

## モンゴル仏教の開拓者サキヤ・パンチン

嘉木揚凱朝

モンゴル仏教については、いままでに学術的かつ総合的な評価がなされていないのは、周知の事である。モンゴル人の文化的基盤の多くは、仏教に依るところが大きい。それにもかかわらず、仏教伝来の年代や由来についてすらも、明確な研究がなされていない。モンゴルにいつ仏教が伝来したかは、まだ定説がない。学者や学僧の立場によって、伝来年代が異なっているのが現状である。

この小論の意図は、モンゴル帝国のゴダン・ハーン（闕瑞汗 Gudan Han 1206-1251）が、チベット仏教のサキヤ派の第四祖サキヤ・パンチン（薩迦班智達・Saskya Pancin 1182-1251）をモンゴルの地に招請するために書き送った手紙と<sup>1)</sup>、サキヤ・パンチンが、この招請に応じてモンゴルに着いた後、チベット人がモンゴル帝国に帰順するよう説得するために書き送った手紙「薩迦班智達致蕃人書」（Bu sLob rNams lasPrin ba bShugs）<sup>2)</sup>を解明するものである。この二通の手紙は、モンゴル帝国に帰順することによって、両民族の間に仏教を通した絆が生まれ、その絆が太くなっていったのは、その後の歴史が証明するところである。

サキヤ派の第四祖サキヤ・パンチンは、実名はサキヤグンガキヤルザン（薩班・袞嘎堅讚 Saskya Kun dgah rgyal mtshan）という。サキヤ・パンチンは、サキヤ派の祖師の中で、始めて正式に出家した比丘であった。一生チベット全土をへり巡り、各地の寺院の高僧を訪ね、多数の説法や弁論会などに参加した。師の学問が優れていたため、人々は師を尊称して、「精通五明のパンチン」（班智達 paṇḍita）と呼んだ。当時、チベット随一の高名な学問僧であった。サキヤ・パンチンは、チベット仏教の有名な領袖であるだけでなく、優れた学者でもあり、膨大な論書を著わした。現存している主要な書物の中に、有名な『薩迦格言』（Saskya legs bśad）があり、以前のインド、及びチベット仏教における各派の得失を系統的に評価し、仏教の理論を構築している『三律義論』（sDom gsum rab dbye）がある。サキヤ・パンチンの時代は、チベット社会が分裂の真っ只中にある時期でもあった。各地方が互いに争い、戦争に明け暮れる中で日々の生活を送る民衆にとっては、生活に必

要な家屋や家財や家畜などが激しく破壊されていく、大変困難な時代であった。サキヤ・パンチンは、63歳の高齢で、「長途跋涉数千里」といわれる長途の旅に出た。自分の生死をいとわず、毅然として涼州（現在の甘肅省）に赴き、有史以來始めて、チベット人はモンゴルの王室と直接に政治的な関係を樹立した。サキヤ・パンチンの努力によって、モンゴル帝国はチベットを戦争の渦中に巻き込むことがなかった。サキヤ・パンチンは、まさにチベット民族の歴史に大きな足跡を残した人であるといえる。

チンギス・ハーンの孫ゴダン・ハーンは、南贍部洲で「怙主」（mGon po）と呼ばれるサキヤ・パンチンをモンゴルに招請し、モンゴルの地に仏法を高揚した。ゴダン・ハーンは、モンゴルの地に仏法聴聞による利益と安樂をもたらす師を求める親書を与えて、ダアルハンの太子ドルタノリボ（多達那波 rDo rta nor bo）を使節としてチベットに派遣した。親書は、「長生天氣力里，大福蔭護助里，皇帝聖旨」つまり、長生天であるチンギス・ハーンの力によって、先祖代々の福德の護助するところによる皇帝の命令、という呼び掛けで始まる。「父母と天地の恩恵に報いるために、私には、道を示し善悪を区別できる上師ラマが必要である。尊者を選んで、上師と決めた。モンゴルまでの旅は大変な苦勞をとまなうと思われるが、勞をいとわずモンゴルに来てほしい。若し、尊者が年を取っていることを口実に、モンゴルに来ることができなければ、それは衆生を利益するためには、釈迦牟尼仏が身命を惜しむことがなかった事実に反する。尊者の仏法修行の誓願にも反する。我が国の軍隊を派遣すれば、多くの衆生の生命を害なうことになる。尊い教えで衆生に安樂をもたらすために、できる限り速やかにモンゴルの地へ来てほしい」と、日付は龍年（1244年）8月30日とある。

硬軟織り混ぜた親書を読んだサキヤ・パンチンは、幼い頃に聞いた第三祖ラツファジャルザンの予言を思い出した。お前の後半生には、360種の異民族があり、720種の言語を話す北方のモンゴル地方から、菩薩の化身であるゴダンと呼ばれる王の命を受けて、ダアルダというモンゴル人が、鷹の頭のような帽子を被り、豚の鼻のような靴を履いて、使節として来蔵し、お前をモンゴルに招請する、というものであった。

サキヤ・パンチンが、モンゴルに招請されたのは、1246年チベット暦の陽火馬年のことであった。サキヤ・パンチンが65歳、甥のパックパ（八思巴・洛追堅讚 hPhags pa blo gros rgyal mtshan 1235-1280）とチャクナドルジ（茶那 Phyang na rdorje 1239-1267）の二人を連れての来蒙であった。サキヤ・パンチン以下三人がゴダン・

ハーンに接見した時、王は病床にあった。サキヤ・パンチンは、ゴダン・ハーンのために『獅子吼法』を供養した。その供養によって、ゴダン・ハーンの病気は全治したと伝えられる。ゴダン・ハーンとサキヤ・パンチンが、正式に会談したのは、淳祐七年（1247年）であった。この会談が、世にいう涼州会談である。サキヤ・パンチンが、涼州会談の結果を受けて、チベット仏教の各教派の領袖と各地の代表者に向けて書き送ったのが、この「薩迦班智達致蕃人書」という手紙である。手紙の題は、チベット語の原文では、弟子達に送った手紙（Bu sLob rNams la sPrin ba bShugs）となっている。

手紙の主な内容は、サキヤ・パンチンがチベット人に、モンゴルに帰順することの必要なことと大切さを明確に説明したところにある。この手紙を機に、チベットはモンゴル帝国に帰属し、チベットとモンゴル帝国との政治的な関係を樹立することになった。「私は、仏法を高揚するため、衆生を救済するため、更にチベット語を使っている人々を慈念し、モンゴルに來た。私を招請した大施主ゴダン・ハーンは、大変喜んだ。尊者が初めてモンゴルに帰順することによって、残るチベット人も皆引き続いて帰順するものと思われる。サキヤ・パンチン、尊者は、聖なる仏教を護る人である。だから釈尊の教えを、間違いのないようにモンゴルの地に広く伝えなさい。」という一節のあるサキヤ・パンチンの手紙は、ゴダン・ハーンが菩薩の化身であり、仏・法・僧の三宝に深く帰依した人であることを示している。ゴダン・ハーンは、サキヤ・パンチンに、私の全ての行為が善いか悪いかは、上の天だけが知っている。ゴダン・ハーンである私は、必ずチベット人に安心した安楽な生活ができることを保証する。」という、チベット人の安全を保証する一節もある。さらに手紙は、「ゴダン・ハーンが、私に大きな関心を寄せている。だから、金・チベット・ウイグル・西夏等の善知識・大徳も、各地の人々も皆、ゴダン・ハーンが私に関心をもっていることを特異なことであると考えて、三宝に帰依してくる。私を始めモンゴル帝国に來た人は皆、衣・食・住に何の苦勞もしていない。モンゴル帝国は、私達に深い関心を寄せ、私達は厚遇されている。」とも書き示し、安心してモンゴル帝国に帰順するよう説得の言葉を続けている。

サキヤ・パンチンは、63歳でモンゴルに赴いて以来、モンゴルの地涼州を離れることがなかった。幻化寺（sPrul pa sde）で入滅したのは、70歳、1251年11月14日のことであった。チベットとモンゴルとの強い絆は、サキヤ派のサキヤ・パンチンの來蒙が端緒であった。サキヤ・パンチンは、示寂後の來世で、空行尊（mKha

hgroma) になり、十地をことごとく証得し、その後極楽世界に往生し成仏したと、モンゴルでは深く信じられている<sup>3)</sup>。

もし、サキヤ・パンチンが、モンゴル帝国に協力しなかったら、またもし、チベットの僧俗を代表してモンゴル帝国と会談をしなかったら、現在に残るチベット仏教とチベット文化は、戦禍の中で存在し得なかったと考えられる。チベット社会もどのようなようになっていたか分からない。

モンゴルにとっても、どのような宗教を受け入れるかによって、世界中に影響を及ぼした戦禍がどれほど酷いものとなったかは、計り知れない。サキヤ・パンチンの偉大さは、自分の身や自分の家族だけに関心をとどめなかったことにある。チベット人のこと、モンゴル人のこと、あるいは、全人類のことを考えたところに偉大さがあると思われる。

「黄金があれば、欲しいものは自然に得られるので、よくよくこのことについて考えなさい。」と、サキヤ・パンチンの手紙の中にある「黄金」は、モンゴル帝国の力を指している。このことから、サキヤ・パンチンはモンゴル帝国の力に頼れば、チベット文化も、チベット仏教も、そのまま残すことができると信じたこと、読み取ることができる。

昔も今も、宗教は、国家や政治から離れて、独立し、成功したためしがない。仏典の「四摂法」に説く、世間和合の同事が教えるところである。そうしなければ、民衆に受け入れられない。逆にどのような国家も、宗教とうまく協調しなければ、国家としての発展性がなく、平和な国家をつくることが難しいことを歴史が教えてくれる。

- 
- 1) 王輔仁・陳慶英編著『蒙藏民族關係史略』（中国社会科学出版社、1985年）18頁。久明柔白多杰『蒙古仏教源流』（中国青民族出版社・チベット語、1993年）100～101頁。
  - 2) 恰白・次旦平措『薩班・衮嘎讚全集』第三冊（西藏藏文古籍出版社、1992年）494～499頁。
  - 3) 久明柔白多杰『蒙古仏教源流』（中国青海民族出版社・チベット語、1993年）105頁。

〈キーワード〉 モンゴル仏教発祥、サキヤ・パンチン、ゴダン・ハーン、親書

（愛知大学大学院）